

其上立御屏風八帖年太宗或四帖云云、不可然、往

〔おもひのま、の日記〕四月十日比、やがて立后あり、御調度深き寶藏よりめし出され、月次の御屏

風の下繪色紙歌の心ばへなど、ことにえりと、のへさせ給ふ、

〔明月記〕寛喜元年十一月九日癸酉備後前司來談、宰相來會愚歌三首詠改今日清書了高檀紙七枚續之

作、月次屏風十二帖和歌

名字無官者如此歟

正月元日如此書之不書題、于細只若榮霞等字也

〔類聚名物考〕調度四、四季屏風、まきのべうぶ

春夏秋冬四季の花鳥などかきたるをいふ、

〔禁秘御抄上〕一清涼殿

五間北第一間母屋爲御路次、中略石灰壇四季御屏風、三尺、南第一間母屋御簾下、以東爲面、此御屏風之中、在陪膳圓座、

〔禁秘抄〕清涼殿

一間ノ母屋ノ下ニ、四季ノ御屏風一帖繪ヲ端向立タリ、ソノ内ニ配膳ノ圓座アリ、

〔禁秘御抄上〕一恒例毎日常次第

内侍兼敷大床子圓座於石灰壇南間中央、立廻四季御屏風垂御簾、或不垂

〔侍中群要上〕立替御屏風

石灰壇御屏風一帖四季立替云々、石灰壇屏風四季立替之近代一帖書、四季〇中略御厨子東御屏風一

帖四季立替云々

〔日中行事〕石ばいの壇におはしまして御拜あり、たつみにむかひて兩段再拜、その外御心にまかすべし、一間の母屋の下に、南むきにたてたる四季の御屏風とりて、御後の方御傍にたて、大床